

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

美學講話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

編輯者の序

一般教育學の基礎として、美學の研究の尊重せらるゝことは此の頃の著しい新傾向であります。丁度倫理學や心理學が教育學の基礎として尊重せらるゝと同じように、美學が教育研究の方面に縁の近い密接な關係を有するようになって來ました、教育者が美學の知識を要することは現今の大勢と申してよいのであります。今日の教育者で美學の知識の無いのは甚だ時勢に遅れたことになりませう。

それが普通の教育に於て左様であります。幼兒教育に於ては猶更のことでありませう。

(一) その第一の理由は斯うであります。教育に美學の法則の研究の必要なことを主張する人の標言に『兒童を教育するは藝術家がその作品を作るやうなものである』といふことがあります。之れは確に一つの真理でありまして殊にその教育さるゝ兒童の年齢が幼い場合ほど一層真理であります。即ち幼兒教育者は、一面に於て、世にも美ばしき天分を有する大藝術家の中に列すべきもので、また其の素養を要すべきものであります。

(二) 第二の理由は斯うであります。

幼兒教育に取扱はるゝ教科教材は、殆んど皆美學の研究問題に關するものであります。勿論幼兒の唱歌、畫圖、手技等が、直に藝術ではありません。また、餘り藝術的標準で教育してはならな

いのであります。しかし吾々が研究の上からは美學の問題として取扱はるべきものであります。美學上の理論がそれ等の教科の正しい解釋に就て教へて呉れるのであります。

(三) 右の二つの理由を合はせて第三の理由が出來ます。

體幼兒教育が小學校以上の發育と、性質の上にも方法の上にも大に違ふものであるのに實際上げ屢々誤り混ぜられて居るのは、幼兒教育の理論が、矢張り小學校の教授法から割り出されて居る爲であります。そこで此の弊を救ふには幼兒教育の方法、教科兩方の研究を美學の知識に參照するのが一番適切な途であります。即ち、幼兒教育上の新開拓、新天地は、美學の知識を適用することによつて得らるべきものではあるまいか。編輯者はかねて斯う考へて居るのであります。而して幼兒教育者に美學の知識の必要を唱道して居るのであります。

本誌が此の『美學講話』を連載して、諸君の精讀をお勧めする理由は、上述三點で明かに御了解下さつたことと思ひます。幸にして、菅原文學士は、私共の此の希望に極く適切なる順序、内容、程度に於て、此の講述の承諾を與へられたのであります。尙ほ十八講の全部が終つた時、此の講話を豫備知識ともし、また講本として、同學士に一層綿密な説明や、音や色や形の實物に就いての講義を願ひ度ひと思つて居ります。而して、私共の希望を益々確にしたと思ひます。

譯者の序

編輯者が右に述べられたやうな主意に基いて、本號から此の『美學講話』を連載致します。

凡そ研究の對象として、子供の觀察と美術の研究ほど、婦人にふさはしいものはありませんまいと、かね／＼私共は思つて居ります。一體婦人の精神的活動に就ては、歐米は、思想なり教育なり水準が我邦よりも高いのと、又總體の背景が我邦よりもずつと早くから出来上つて居るからでもありまじやうけれども、殊に此の點に就ては、何よりも羨ましい事に思つて居ります。

例へば兒童の研究者としては、米のシン女史、ムーア夫人、伊のパオロ・ロンブローゾー女史の如きは、皆それ／＼有益なる著述を發表して居りますし、又美術の觀察や美學上の研究に熱心な婦人としては、英のリー女史、獨のラントマン・カリツシエル夫人、米のマルティン女史、パツフロー女史、ゴルドン女史などは、何れも名高い人々であります。

ゴルドン女史は、シカゴ大學の人で、先年獨逸のヴェルツブルグに遊學して、哲學、心理學、美學の研究をした人で、一九〇四年に同地で發表した「感情的印象の記憶に就て」と云ふ論文は、心理學美學教育學何れの方面より觀ても、興味ある問題として知られて居ります。

一〇九年には茲に御紹介する「美學講話」の原書たる「美學」を著し、一九一二年には「色彩の配合」に關する面白い實驗的研究を發表して居ります。

本書は最近の心理學上の研究と美學上の觀察に基き、藝術一般に涉つて親切に説明を與へて居りますから、斯う云ふ目的を以て御紹介する書物としては、極めて適當なものであると信じます。尙原著の序を次に引きますと

「此書は専門學校程度の學生に讀ませる爲め、且専門學校の三四年程度で課せられる位的美學の講義の教科書に充てる爲めに著したもので、此書の目的とする所は第一に學生に美的經驗及美的活動に關する最も重要な事實を簡潔に傳へるため、第二には學生間に美的問題を實驗的に取扱ふ興味を起させる爲めである。」と書いてあるのを見ても大體が御分りになる事と思ひます。

右に述べたやうに、皆様に讀んで頂くと云ふ事を主にして講述して行くのでありますから、翻譯とは申しながら非常な取捨が施されて居ります。

併しながら要するに翻譯はやはり翻譯であります。女史の著述の大體の方案が出来上つて居て、それを尊重してそれに據つて、それを襲うて講述して行くのでありますから、餘り皆様の方へ引付け過れば、女史に對して禮を失する事になりますし、之と反對に餘り女史の原著に據り過ると、亦皆様にそぐはない處もちよいく／＼出來て参ります。従て私のして居ります事は、縛られながら動きのとれるやうにと云う矛盾に陥つて居るのであります。そう云ふ缺點は豫め皆様の御許しを願つて置かなければなりません。

美學講話

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

第一講 入門

目次

美學とは何ぞや——藝術品と自然美——科學としての美學——美學と批評——美學と心理學——美學は規範科學なり
や——美學の目的——美學の方法——研究の方案

美學とは何ぞや

いろ／＼違つたものを澤

山集めて、是を一纏めにしてきちんと一部門に收めやうとするには、どうしてもその中の銘々に備はつて居る共通點を搜し出し採り出して來て、是を基礎としなければなりません。尙例を以て御話するならば、たとへば悲劇と喜劇、寶玉と寺院、唱歌と繪畫、と云ふ様になら懸け離れたものを、一纏めにする共通點とは元來何者でありませうか。曰く斯う云ふものは、皆美しいと云ふ點に於て同

様である。即ち共通點は美と云ふ事でありませう。すると、其の中には眼に見えるものもあれば、見えぬものもある。聞く事の出來るものもあれば、出來ぬものもある。巧に配列された言葉の文あやから成つて居るものも、然様でないものもある。とすれば一體美の性質とは何で有るかと云ふ問題が起つて參ります。

是に對する答は、第一に美とは藝術品自身に依つて極きまり、第二に此の藝術品を見る人の趣味に依

て極ると云はなければなりません。今此の第一と第二とを合併して纏めて云つて見れば、寺院、繪畫、音樂と云ふやうな第一の方の所謂藝術品は何れもそれを鑑賞する人の感情の上に、各特種の効果及ぼすと云ふ點に於て相似て居る、此の特權の効果は取りも直さず第二の方の美的感情、もつと適切に云へば美意識であります。元來此の美意識の態度即ち藝術品の觀方には二つあります。甲は自分で手を下さずに藝術を讚美し鑑賞するもの、見地で、乙は藝術家若しくは製出者としての立場であります。此の二種の意識を共に調査するのが主觀的方面からの美學の仕事で、換言すれば美學の一半は美しい物の鑑賞と製作とに關する感情の科學であります。又客觀的方面から云へば、美學は左様な感情を起させる美しい物即ち藝術品なり（自然美なり）の解剖と分類とを其仕事とします。換言すれば美學の他の一半は藝術品の科學であります。

藝術品と自然美

美學は藝術の美と自然の美とを共に研究しますが、兩者の中、藝術の美の方が一層重要視されて居ります。其理由としては、第一に自然の鑑賞は人間の製出した藝術品の鑑賞から出たものである事。第二に自然は其れ自身としては、美的經驗に肝要な個人的表出を缺いて居ると云ふ事、尙是は後に申します。第三に自然美は藝術品よりも實驗的の調査がむづかしく、從つて觀察者は多く好結果を得る事が出来ませぬ。故に自然美も全く美學の範圍外ではありませんが、主要な問題は却つて藝術品の方であると云はなければなりません。

科學としての美學

美學は科學の方法に從つて居りますから、矢張一の科學であります。故に美學者は標本を集めて、是を觀察し比較し分類して説明しやうとし、出來得る場合には適當な條件のもとに實驗をも試みます。美學の研究者は感情上の經驗や、「美」「醜」の判斷などをその研究の

資料とし、尙判斷を下す人、判斷を生せしめる事柄、並に判斷に附隨して起る情況などを觀察します。亦美學者は更に進んで同一事物に就ての異なる人々の判斷を比較し、異なる事物に就ての同一人の判斷を比較します。斯の如く或は對象の特徴を一々變化させ、或は被験者を色々の氣分において精細なる研究を重ねた結果として、どの場合に於ても終始一貫した或る事實を見出す事が出来れば、そこで始めて美學上の一つの法則の基礎を得て、徹底した或者を獲る事が出来た譯なのであります。

美學と批評

一言で言へば批評とは判斷を下す行爲である。批評は美の標準又は本位を準據として作品の良否を知る事であります。故に批評と美學とは、共に藝術上の製出物を取扱ひ、其の良否と良否の理由とを説く點に於て共通して居ります。次に美學と批評との差を申すならば、美學の方は美の標準を發見する事と、それを式で示す

事とに就ては批評よりも骨を折ります。もつと精しく申すならば、美意識の一般的の法則を見出して、その學理を建てるのが美學の仕事であつて、その法則が個々藝術品に應用された路行を探索する方が批評の領分となるのであります。更に此の二つの物の關係を短言すれば、批評は個々の場合の美學とも申されませう。又批評が美學に優れて居る一つの點は、批評は其れ自身藝術品たる事もある點であります。

美學と心理學

申すまでもなく心理學は心の働く有様を調べる學問即ち心的過程の科學であつて、感情、情緒、氣分等が其の研究問題の中にありますから、従つて此の中には美的感情又は美意識即ち美學の主觀的方面の研究事項が悉く含まれて來る譯であります。故に主觀的方面の美學と云ふものは勢ひ心理學と云ふ美學よりも大きい科學の一部分と考へて差支へがないのであります。茲では美學者を以て、一部分を一層精密に穿鑿する

心理學者と看做し、美學は進歩せる心理學の一部分と看做して置きます。

美學は軌範科學なりや

規範とは準據す可

き規則又は標準と云ふ事でもつと碎いて云へば手本と云ふ意味であります。科學を分類するに記述科學と規範科學との二種にするのが普通です。記述科學の方は單に事物の性質を明らかにし、如何に在るかと云ふ有様を述べるに過ぎないのであります。軌範科學の方はそれのみならず、如何に在るべきであるかと云ふ事迄説くものであります。

換言すれば、記述科學のやうに現實の狀態に甘んぜず進んで理想的狀態まで指示するのが軌範科學の綱要であります。

扱て心理學は心の有様を在るが儘に見て解剖し、記述して行くもので、例へば斯う云ふ考へを持つては不可いとか、この考は正しくないとか、これは醜いとか云ふように、その心的過程の善惡、美醜、合理不合理等には一向かまはぬ科學である

と云ひます。然るに是に反して、論理學は眞正の判斷と虚偽の判斷とを區別し、合理的の法則を示し又倫理學は人に如何なる行爲をすべきかを示し、最後に、美學は趣味の適當なる銑練を示し、且何を美とす可きかを説きます。斯の如く論理學、倫理學、美學は人が思考する時行爲する時感ずる時に補助となると云ふ意味に於て、規範的である、手本を示すものであると云ふのは眞實でせうし、斯る學問は各々標準軌範又は手本を立てやうとして居る事も確であります。

併し乍ら退いて考へるに、此の規範と云ふ事は等の學問と外の科學との相異點であるとは思はれませぬ。論理學や倫理學や美學のみならず、寧ろ凡ての科學は軌範を作らうとして居ると云はなければなりません。例へば心理學は常態の人の心と云ふものを確定しやうとし、變態心理學に於てすら、典型亦是軌範を認めて居ります。其他化學、生物學、又は數學の如きもの、智識すら猶、其方

面の結果を得んが爲めには如何にす可きであるかを知る爲めの學問であると云ふて宜しいのであります。例を舉げて云ふならば、血液の循環を早める爲には、アルコールを用ふ可きである。圓の圓周を得んが爲めには直徑に一・〇四一六を乗ず可きである、等の如きに見ても、記述科學も亦一面軌範的であると云へると思ひます。

これと同様に軌範科學も亦一面に於ては記述科學であると云ふ事が出來ると思ひます。例へば倫理學は個々の場合に就て人の探るべき道を語るものではなく、只だ過去に於て善と思はれた行爲の例を積み上げる事しか出來ないのであります。又論理學は現在の或情況からどんな結論を引出すべきかと迄は云へないので、たゞ過去に於て或資料から如何なる方法で有效有用な推論が出來たかを示すに過ぎませぬ。最後に美學はどう云ふ筆使ひで一番佳い畫が出來るかと云ふ事は云へませんが、既成の藝術品に於ける美の要素を分類し、記録

する事は出來るのであります。換言すれば美學は外の科學と同様で、記述的でもあれば軌範的でもあるのであります。

美學の目的

世間には自分の好きなものを知るのには譯もない事であると心得てゐる人が多勢あります。よく「私は藝術の事は何にも知らないが、併し自分の好みは分つてゐる」と云ふ人があるものですが、これは非常な間違です。

人は自分自身の趣味に就ては一向知らないもので、自分で氣に入ると思つたもので、それを得ると失望することが屢々あります。

美學の主要な目的は、人各々に自分の趣味を自覺させ、それを明らかにさせると云ふ點にあります。

美學の方法

美學の方法は取りも直さず心理學の方法で、其種類は分つて觀察法、内省法、及實驗法の三とする事が出來ます。つい近年迄は觀察法と内省法とに主に頼つたもので、實驗法は此

の頭發達した新しい方法であります。

觀察法は客觀的方法とも云ふ可きもので藝術品自身にも、亦其れを樂しむ人にも兩方に應用する事が出來ます。樂しむ人に此の方法を用ゐると云ふのは聞く人の顔面の表情、姿勢、身振等を記す事であり、又藝術品自身をも觀察すると云ふのは、つまり美たる事物の觀察と云ふ事になります。斯の如き方法を用ゐれば、是に依つて美の法則を幾分知る事が出來ます。例へば藝術史と藝術の進化の研究とは此の方法に屬するものであります。

内省法と云ふのは主觀的方法で、物を美しいと思ふ時の心持は奈何か、藝術創作の心的活動とはどう云ふものかを調べるのであります。

實驗法と云ふのは或る條件にを以て制限された觀察法及び内省を指して云ふので、或は學者は感情に適用した實驗法を主として二ツに分け一を印象法、一を表出法を呼んで居ります。印象法の場合

は實驗者は被験者に示すべき材料をよく整頓し、是より生ずる被験者の印象即ち感じを集めて一定の結果を導いて來やうとするのであります。通例實驗の結果は「快」又は「不快」と云ふ判斷で報告せらるゝ、被験者の心的状態の内省的記錄を取る事であり、表出法では實驗者は豫め被験者に一定の連續刺激を用ゐて、例へば繪なら繪を見せて置いて、被験者に快不快何れかの心持を備へさせ、此の心的状態から生ずる的確な結果——通常呼吸とか脈搏とか顔面や四肢の表情運動とか云ふ生理學上の現象により注意するのであります。

要するに科學としての美學の進歩と云ふ事は、美學上の問題に對して段々實驗が應用されて行くのを云ふのであります。

研究の方案　藝術の研究に當つては、藝術

製作の二方面、即ち感情と形式とを必ず區別致します。藝術品の製出は「情緒より形式へ」の進歩で、此の働きは精しく云へば感情を傳達し表出す

る感覺と心像を發見し且つ是を調整すると云ふ事
であります。即ち製作の方は感情が土臺で、是を
傳達する媒介者として感覺及心像即ち形式を用ゐ
るのである。次に藝術の鑑賞はこれと逆で、此の
感覺及心像即ち形式と云ふ仲介者を通じて、情緒
を鑑賞する作用であります。心像は感覺の再現し
たもので、記憶の心像もあり又想像の心像もあり
ますが、藝術上では主として想像心像が働いま
す。斯の如く動作するには感情と想像とがいりま
すが、鑑賞するには想像と感情とが必要でありま
す。

是で大體の緒論とも云ふべきものが終つたので
あります。是れから第一に心像と感情とを心理學
的に説明し、次に藝術の起原と其の職分とを論じ
て、各特殊の藝術に對しての美學を究めやうと思
ひます。

第二講 心像の話

目次

精神作用の知的方面と情的方面——知的認識的作用——感覺とは何ぞや——心像とは何ぞや——視覚心像——聽覺心像——運動心像——言語心像又は說話心像——何れが美的感覺なりや——心像及思想即形式及内容——心像の論理的職分——心像の美的意義——創作的想像心像。

精神作用の知的方面と情的方面 一般の心理

學者は、人間の精神作用の全體を、知ると云ふ認識的方面と、感ずると云ふ感情的方面と、此の二つに分けます。感覺、知覺、聯想、記憶、想像、思考等の働は前者に屬し、感情、快不快、情緒、激情、氣分、情操等は後者に屬します。そして認識は客觀的方面と關係を持つもので、對象、出來事及外界の状態に就て語るものであり、感情は主觀的方面に關して個人的反應を表出し、又は主體即ち自分と云ふもの認識的刺戟の受け取り方を記するものであると申して居ります。

猶又認識の働は特殊の感覺機關と關聯するもの

で眼とか耳とか云ふやうな刺戟を受取る道具が其根本に於て必要であります、感情の作用の方は有機體を全體として包括する傾向が著しい即ち身體全體の調子と深い關係があります。

情的方面の細かいとは、第三講の「感情の話」の處で述べるとして、次に知的方面に就いて、大體の話をしてしましやう。

知的認識的作用 實物が目の前にあると無

いとを標準にして、知的の精神作用を分けて見ると、直觀又は知覺と云ふ作用と記憶・想像・聯想・思考などと云ふ働きと、二組にする事が出來ます。

知覺又は直觀と云ふ方は、菊の花なり哀みの曲

なり要するに實物があつて夫れが目や耳などに觸れて居る時の知的の經驗を指して云ふので精しい事は次に述べます。之に反して記憶・想像・聯想・思考等になれば、目の前に實物がないので、曾つて聞いた哀みの曲を想ひ出したり、又は美しい菊の花を想像して見たり、菊の花と哀みの曲との關係を推定したりする事でありませう。そして斯る記憶にしても想像にしても、要するに曾つて見たり聽いたりした實物の姿が、其通りにあり〜と心に浮んで來るなり、又は實物を變化したり置き變へたりして新しい局面を思ひ浮べたりする事であつて、そして其基く處由來する處は、どうしても實物を經驗すると云ふ事、即ち知覺と云ふ作用であります。

次に其直觀又は知覺と云ふ働を考へて見ますならば、今菊の花を見て居るとすれば、花の白色や葉の綠色、葉や花の形と大きさ、自分よりの距離、若し細い花瓣が散れば其舞ひ落ちる運動、又花が

萼のつけ根の所からとれて机の上に落ちれば其バサリと云ふ音などを認める事が出來る。そして丁度化學上で水を分解すれば酸素と水素と云ふ二つの元素になるやうに、この菊の花の知覺を心理學の方で分析して其構造を調べ其成分を假りに元素又は要素に分けて見ると、一々の色や音や運動と云ふやうな極めて簡単な感覺と云ふものになつて來るのであります。

感覺とは何ぞや

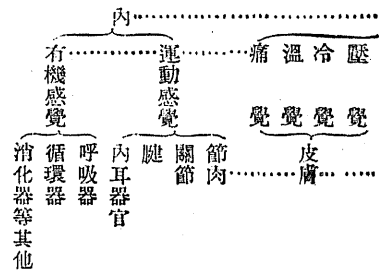
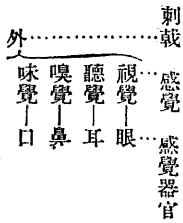
感覺は知覺と云ふ一つの纏まつた働を組立てる要素又は材料であります。

一體吾々が日常經驗して居るのは、決してこの白だの緑だのと云ふ一つ〜の材料ではなく、斯る材料が結合して拵へ上げて居る菊の花と云ふ全體の知覺であります。たゞ科學としての心理學の取扱ひの上から、丁度化學者が化合物としてのみ存在して單體として取り出し得ない炭素と云ふ元素の性質を論ずるやうに、假りに其一つ〜の材料を取り出したとして、これを感覺と名けて研究を

するのであります。

何て感覺はどうして成立するかと云ひますと、先づ第一に刺戟がなければなりません。空氣の震動がなければ音の感覺は起りませぬ。エーテルの震動がなければ色の感覺が起りませぬ。第二に此の刺戟を受取る器官即ち道具がなければなりません。音ならば耳と聽覺の中樞、色ならば眼と視覺の中樞が此の器官に當ります。感覺は斯の如く刺戟と感覺器官とが無ければ成立する事が出来ないのであります。

次に感覺にはどんな種類があるかと云ひますと刺戟と感覺器官と感覺とを各部類分けにして且つ互に相應せしめて分けて見れば次のやうになります。



心像とは何ぞや

一言にして云へば心像とは

感覺の再現したものであります。たとへば昨日見た菊の花を想ひ出すなり、先月聞いた哀みの曲を思ひ浮べるなりする事で、何等の刺戟がなく、又感覺器官をも要せずして、猶且つ色なり音なりがあり／＼と心に浮ぶ、其浮んだ姿を心像と云ふのであります。そしてこれが嵩じて來れば、丁度幻覺のやうに實際眼に見え耳に聽えて來る事すらあります。要するに心像は以前に受けた感覺に依つて出て來るのであつて、吾々は未だ曾つて經驗

した事のない事物に就いては、どんな單純なものでも決して其心像を得る事は出来ませぬ。

知覺と云ふ實物が眼の前にある時の經驗を組み立て、居る成分要素又は材料が、感覺であると等しく、記憶・想像・聯想など、云ふやうな、實物が眼の前に無い場合の精神作用即ち表象又は觀念を組んで、居る成分が取りも直さず此の心像であります。

心像は感覺の再現でありますから、以前に經驗した感覺上の極めて簡單なる印象即ち一々の色なり音なり運動なりが心に浮んで來る事でありません。斯の如く一々の簡單なる感覺、例へば赤とか白とか青とか云ふ範圍内では、心像は單に元の感覺が再現するのみで、新に發明する所がありません。之に反して複雑なる事物なり光景なりを心像として思ひ浮べる場合になれば、要素たり材料たる簡單な心像が澤山集まつて複雑に混合して來るのでありますから、其要素たる心像の組

合せ方の如何に依つては、出來上つて來た其心像は再現的でもあれば又製作的でもある様になります。若し心像が單に古い經驗を其の儘忠實に模寫したものであれば再現的であり、又古い材料を新しい形に整へ直したものであれば製作的若くは創作的であります。

元來イメージ(心像)と云ふ言葉は、心理學者以外では目に見える類似物、例へば寫眞や彫刻が人の像と云はれる様に、似た姿を云ふ事でありますが、心理學上の心像と云ふ言葉は、目に見える物即ち視覺心像に限らず、各の感覺に通じての類似物を意味して居ります。故に聽覺心像もあれば、運動の心像もあり、又觸覺心像もあり、味覺心像もあるものであります。心像は單に感覺的性質即ち色とか音とか、又色にしても赤とか緑とか白とかの別があるのみならず、其の明瞭、續く時間即ち時限及強度なども色々あります。

視覺心像 心に繪を描く働き、即ち視覺心

像化^{ライズ}する作用は、人に依ても非常に違ひますし、同一人でも時に依て違ふことがよくあります。時には知覺と優劣のない様、即ち實物とあまり違はない位に、心像が完全に且生き／＼として居る事もあるので、これが即ち精神病者などによくある幻覺^{ハルシネーション}であります。併し常態ならば、心像はそれほど完全ではありませんから、感覺的經驗即ち實物と容易に區別が出来ます。一流の視覺^{ヴァイジュアルタイプ}心像型の人になれば如何にも生き／＼と過去の光景を思ひ出すことが出来るのみならず、猶進んで新らしいものを想像する事も出来ます。何れの場合にしても、事物の形、細部、光、色等が的確に表はれるので、斯う云ふ^{たち}質の人が繪が上手ならば、其記憶心像から實物と違はないやうな繪を寫し出す事が出来ます。視覺心像化する力の中位の人は、光景は可なりよく表はれて居り乍ら、其中一二の要素が際立つて明瞭で、外のは夫れ程ではないけれども、特に注意すればはつきりして來ます。又極めて朦朧

たる不完全な視覺より現はれない人もあり、甚しきに至つては全然何にも現はれない人さへあります。

聽覺、觸覺其他の種類^{ヴァイジュアルタイプ}の心像よりも、視覺心像を廣く用ゐる人を視覺型の人と申します。視覺型の人とは、必ずしも例外な視力を持つてゐるのと云ふ譯では無いので、或は却つて並より悪い眼の人も居りませう。視覺型^{ヴァイジュアルタイプ}の人は觸れたり、聞いたりするものより、見るものに氣をとめ眼を通して得た材料に依て思考する様な人を云ふのであります。視覺型^{ヴァイジュアルタイプ}の人は話を聞く時に、先づ其の言葉を言語の繪畫に引き直して、心で見た字句から意味を掴む人もあり、又或言葉、句、調子、關係等は必ず色や空間の形を暗示して居る様に見る人もあります。一般には科學的又は哲學的な頭の人は視覺心像化する力に乏しく、機械學者、建築家及藝術家はその力に富み、婦人及小兒は概して男子に勝つて居ると申します。

美學上では視覺心像を好愛し、他の經驗をも其れに依て説明しやうとしたり、又はそれに翻譯して仕舞はうとする人などは、視覺的氣質の人と云へやうと思ひます。

笛吹きが刻み成す音の響

及び

笛の音は圓柱上の脆き大斗たいとの如くアルトに昇り行けり。

の如きは音響の心像を視覺及運動の心像に引き直す人の適例であると佛國の心理學者のリポーは云つて居ります。又シェレーの名詩「雲雀」中には次の様な面白い例があります。

おしなべて地つちも天そらも

汝ながこゑにひゞき渡れる、

冴ゆる夜の

孤ひとり雲うらより

月の光ふりそゞぎ、大空にみなぎることく。

視覺心像は記憶に留まる難易と云ふ點から數種に分かつ事が出來ます。例へば人に依つては事物の運動が最も容易く記憶に登る人もあれば、之に

反して靜的外觀即ち形とか色とか光などを好く人もあります。

運動の姿で成り立つた心像は、例へば飛ぶ雲とか降る雨とかのやうな自然物の動作と同じな身振り、瞥見、姿勢等に豊富で、斯る運動的の姿が歴々と眼に浮んで來るものでありまして、これは後に述べる運動型と確に共通して居る所もあります。併し此場合では心像は運動の視覺的方面に限られて居ります。斯様云ふ質の人は戲曲的效果を收めるのが上手であります。

形や光や色等の靜的狀態に關する心像は、一層純然たる繪畫的のものであります。併し畫家は皆此の純然たる繪畫的心像を持つて居るとは限らなると云ふのも面白い事であると云はなければなりません。繪畫には文學的、寧ろ敘事的性質を持つて居るものも澤山あります。左様云ふ繪は物語や或る事件の推移を示して居るので、従つて其の興味は形や色より別の事柄であつて、刷毛や繪具の到

底現はし得ない事になるのであります。併し、元來繪は時間の推移を現はす事の出来る者ではなく、又繪に物語同様な事件の聯絡を示す様に望むのは無理であります。要するに繪畫と云ふものは單に色の效果、線と線の關係、或は或人の現在の形だけを現示すればそれで十分なので、是が現に最も面白い眼に見る物語なのであります。

この論旨から云へば、此處に掲げたミレーの名畫「暮鐘」は佛蘭西の暮鐘に對する外的知識に依る所が非常に多いから、嚴正なる繪畫的構想では無い、と云ふ批評があるのも尤もな事であると思ひます。



故に換言すれば、或思想が繪畫的であるか否かは、第一其の繪畫に題が無くても分かるか如何かで極まるものと云はれなければなりません。例へば淡黄、眞紅、靑、斯う云ふ色が畫面に現はれて居

たにしても、何にも題は要りませぬ。さつと拂つた線や柔らかな蔭影等は、繪に取つては立派な題目でありませぬ。線や色そのものを愛するの

せぬ。

聽覺心像

オーディオタイプ
聽覺型の人には記憶

するにも思考するにも、音響の力を借ります。知人を覺えるにも、其の顔では無くて聲に依ります。ヴァイオリンと云ふ觀念を作りなして居る心像は、其の形や色よりも寧ろ音色であります。聽覺型の人には印刷物を讀む時には、其の言葉が聲で云はれた様に耳に響いて來る、さうすると始めて讀んだ所の意味がすつかり分つて來ると申します。又米國のレイ博士は――

「聽覺心像は自分には視覺心像と同じ様に肝要なもので、音樂であるにせよ、ないにせよ、凡て私

の聞いた音を心に再現するのはこれである。強さこそ及ばぬもの、音色、高さ、時間等は實際の音と比べる事すら出来る。自分は一分時間で演奏せらるゝ音楽の一節の聴覺心像を聴けば、一分と云ふ時間を的確に量る事が出来る。」

と云つて居ります。

耳に認へる音の刺戟は目に認へる色や光の刺戟よりも情緒に及ぼす影響が密接で深いものであると云つて居る學者もあります。美學の論では音楽は繪や彫刻のやうな視覺に認へる藝術よりも、氣分及情操をよりよく表はし、且一層主觀的で凡ての藝術中最も感情的なものとしてあります。併しこゝに注意しなければならぬのは、音楽は單に耳に許り訴へるとは限らぬと云ふ事、及其の音の部分、即ち明らかに耳の仕事と極つて居る所すら、リズムほど大切なものではないと云ふ事でありませぬ。然もリズムは必ずしも耳の經驗には限りませぬ。聴覺のリズムは視覺のリズムより一層「運動

的」なものだと云ふ事が分れば、在來の説に非常に好都合であります。光線のリズム的な閃きを研究した米國のマイナー氏は、左様云ふ視覺刺戟は音響のリズムと同じ様に運動を起させると斷言して居ります。

次に非音樂的な音響の效果に就て例を擧げて御話しませう。幼兒は妙な物を見せられるより、妙な音を聞かされる方が遙かにおびえます。成人でさへ雷雨の時には電光よりも雷鳴に感動するものであります。是に關して或人が次の様な事を書いてよこしました——

「私は小さい豚を解剖して居つた。これは遣り付けぬ事ではあり、多少不愉快であつた。併し其の不快の要素は、其の動物の様子や、其れが指に觸れる時の感じでは無くて、缺が皮へ喰ひ込む時の音であつた。無論一方では切ると云ふ考へが不快ではあつたが、其の感情を起させたのは、矢張り豚の様子や觸接のためでは無くて、音響であつた

様に思はれた。其の時を思ひ起す度毎に、同じ感情がギシ／＼云ふいやな音の記憶と共に起つて來る様な氣がする。」

是れは實例に就いて述べたのでありますが、次に生理學の方の理論から申して見ましやう。

音響の感情的性質を生理學上から辯護するものは、大脳の關係上、視覺中樞と運動中樞とよりも、聽覺中樞と運動中樞の方が密接であり、且聽覺の反射中樞は、視覺の其れよりも循環變化を司る神經に近いと云ふ事を云つて居ります。併し其れにしても猶ほ聽覺印象の方が、視覺印象より情的であると云ふ説は果して正しいかどうかは斷言が出来ませぬ。たゞ人に依つて心像の型にいろいろ相異があるのは事實であります。従つて視覺的氣質の人には情緒は視覺及視覺心像の邊に集中しましやうし、又聽覺型の人に在ては、情緒が聽覺の感覺及心像と一層密接に關聯して居ると云ふのが穩な様であります。

聽覺型の人が注意もし又記憶しても居るのは音響の經驗で、さう云ふ人が自然に求める表出は、音樂又は耳に訴へる言葉であります。獨逸の音樂家シューマンは、八歳の時から音樂的肖像とも云ふべき聽覺の心像を描いて楽しんで居りました。それは友達の子供連の容貌や性質の特色まで、色々の歌の節や色々のリズムで心に描き表はしたものでありました。藝術上の聽覺心像の中、最も重要なものは、音樂と詩の二つであります。次のペアティーの詩は聽覺心像の適例で、各行皆音響の心像を暗示して居ります。

されど誰か聞き分かむ歌の調べを、

ほしいまゝなる流れば、山蔭をさざめきくだり、

牡牛のうめき、羊らが可憐の鈴、

いちばやき牧者が笛は、人もなき谷間にむせび、

さわがしきつのはるは、峯かけて崖かけて

はるけく遠く、反響しあへる、

洞空なす海の潮鳴

峰のつぶやき、雀が愛の歌、

さて並木を覺ます豊かなるもるごゑの歌

伏屋の犬は、曉の順禮に吠ゆ

桶がづく乳をとめ、歌ひつゝ、輕げに行けば、

口笛しうそぶく農夫、畑さしてたかぶり歩む、聞け！

坂降りなやむ、重き車のきしめきを、

さら／＼とさやぐ穗わけて、驚ける兎は踏べり、

しづ／＼と村の時計は、ねむげなる時をうちぬ

さと許り異ならして、鶴鳩ら飛び立ち

人しれぬ塔より、斑鳩ぶかくもなげく

さてひばりこそ空の塔より、すゞしげに歎び歌へ。

運動心像

運動型モータータイプの人は、運動に由來した

心像で考へます。人の運動の經驗は、筋肉、腱、關節

からの感覺で出來て居ります。斯う云ふ器官は

凡ての知覺、殊に視覺と觸覺には、必ず働くので

ありますから、従つて運動心像は自然豊富であり

ます。運動型の人は、繪を考へるにもそれを描く

に必要な、若くは其の線を真似るに必要な運動に

依るのであります。行進とか疾走とかを思ふに

は、さう云ふ繪や、足音に依らずに、自分の足に

その運動を感ずるのであります。或行爲の記憶は

緊張及努力の記憶で、其行爲をする時に使ふ身體

の部分に曲がつたり、推したり、引いたりする感

じであります。例へば生れつき視覺と聽覺とが失

はれた米國のヘレン・ケラー女史の心像は甚だし

く運動的且觸覺的で、握手で友達の性格が印象さ

れるので、さうして人を覺えるのだと云つて居り

ます。又専門の運動家及舞踏家は運動心像に依て

考へる事が多いでせう。ベインと云ふ英國の心理

學者は筋肉觀念を論じて次の如くに述べて居りま

す――

「前日骨を折た仕事を思ひ出す時の様に、力の入

つた行爲に對する感情を思ひ起すとする。所で思

ひ出すにつれて非常に興奮すると、自然前の運動

を繰り返す様な勢になつて、容易にこれを止める

事の出來ぬのは明白な事實である。感情は一度び

知つた道に突進して、同じ筋肉を襲ふので、夢を

見てゐる犬が足を動かしたり吠えたりするもこれ

と同じ事である。」 再た「運動心像に依てする思

考は、抑壓せられたる談話又は行爲である。」

言語心像又は説話心像

味覺・嗅覺・壓覺・溫

覺・痛覺・有機感覺と云ふやうな下等感覺の心像の論に取り懸かる前に、上述の視覺聽覺運動感覺から來る三様の心像で成立して居る言語心像ワール・イメージの話をするのが當然の順序であると思ひます。元來言語と云ふものは思想を代表する記號である。もつと精しく云へば、言葉は連續した思想の大部分、及び非常に抽象的な且複雑な思想の全部を補助するに缺く可からざる象徴で即ち符牒であります。言葉は見もし、聞きもし、話しもし、書きもするのでありますから、随つて言語心像は視覺的でもあり、聽覺的でもあり、又運動的でもあります。猶此の事は病理上からも證明されます。例へば失語病即ち話説不隨の病及失書病即書記不隨の病氣に關する事實から、話した言葉及び書いた言葉に對する暗示は、或人には視覺的であり、或人には聽覺的であり、又或人には運動的であると云ふ事が分かります。併し一人で此の三種を混有して居る

事も珍らしくはありませんが。ヘインの説話心像の説明は運動的の言語の心像をよく述べて居りまして、斯様云ふ時に引かれます。「人が言葉又は文章の印象を思ひ起こす時には、口に出さぬ迄も、殆んど發言せん許りに其の發言器官がうごめて止まないものである。精しく云へば發音部即ち喉頭、舌、唇などは皆感せらるゝ位著しく刺戟され運動の心像が明瞭に起る。斯の如き發せざる即ち抑壓せられたる發音が、取りも直さず回想、智的表現、説話の觀念、言語の心像なのである」と。

次に實例を舉げて見ましやう。運動的言語心像を試めす一法は、口を廣く開いて、夫からブクブクとかモグ〜とかいふ様な言葉を考へて見るのであります。斯うして見て言葉が一層明瞭に考へられ、ば、其の言葉の心像は大抵運動的であります。言語心像が劇的、抒情詩的、哲學的等に分けられるのは、一つは記憶に残る言語の文學的性質

から、又一つは各個人の言語心像のスタイルの差から分けるのであります。

他の感覺に由來する心像 人に依ては臭ひ

の心像が非常に重要なものであつて、普通の人に氣の付かないやうな色々の物や場所に對して、それ／＼種類の臭ひを嗅ぎ分ける人があります。

併し此様云ふ人は餘り有りません、有つてもこれは多少異常的であらうと思はれます。冷、温、痛、壓、味、及有機感覺の心像はまだ説きませんでした。吾等は視、聽、運動等の心像程人の思考上に肝要なものではありませんが、これが伴つて來ると、回想が非常に活き／＼して來るものであります。

感情心像 感情若くは情緒の心像とも云ふ

可きものが果してありませうか。リポーは在ると云ふ説で、認識記憶と同様に感情記憶も有るからには、認識心像と同じく感情心像も有ると主張して居ります。成る程人は喜んだり、悲しんだり、恐れたりした事實を、記憶もすれば、想像もしま

す。併し是は單なる認識的行爲に過ぎ無い、記憶心像や想像心像が現れて來るのみで、感情心像があるとは云はれませぬ。眞に感情自身を回復し又は發生させるには新しい感情が必要である、認識的方面に於ける新知覺と同等の新鮮な感情が必要であると云はなければならぬと思はれます。

何れが美的感覺なりや

ヘーゲルと云ふ獨逸の哲學者は、藝術に於ては或思想が感覺に表はれて居なければならぬ、而して其思想を代表する感覺は視覺と聽覺の二種であると云つて居ります。此の哲學者の意見では目と耳以外の感覺は美的經驗に全然關つて居らぬと云ふ意味になります。が、果して此の説が正しいかどうか、先づ此の點を精しく調べて見なければならませぬ。

各種の感覺に訴へる色々の藝術を挙げますと、

(一)視覺に對しては、建築、彫刻、繪畫、裝飾美術、動作及舞踏の技術があり——(二)聽覺に對しては、音樂、詩、話術、等があり——(三)嗅覺に對し

ては、香料があり——(四)味覺に對しては、割烹があり——(五)觸及筋肉感覺に對しては、舞踏及體操等があります。此の中へーゲルに依つて美的と認められたものは、眼及耳に訴へる(舞踏も其の視覺的方面のみを云へば)技術許りであります。

成る程美しい物は根本的には、眼若くは耳に直接訴へる所が無ければならぬ、先づ見えるか聞こえるかせねばならぬと云ふ事は尤ではありますけれども、それにしても猶外の感覺も美意識に對して缺くべからざる心像を供給するものであると主張する事が出来ると思ひます。例へば美の要素として、色の冷たさ温かさ、柔らかさ、音調の甘さ、線の滑らかさ、力、勢、彈力など、云ふ事をよく申します。無論斯様云ふ言葉は譬へに過ぎませんが、其れでもさう云ふ形容は確かに皮膚、味覺、筋肉等の心像を喚起するものであります。又人間の運動的の装置は音樂のリズムとテムボーとに合つて居り、運動に對する刺戟が、音樂及視覺藝術の鑑

賞の大部分を成すことも往々あります。最後に美意識に強烈な情緒の伴ふ時は、有機感覺も伴ふものであると云へます。故に美しい物は聽、視のみならず他の感覺にも關係のある事が分かります。斯様云ふ外の感覺の心像は邊として、背景として、若くは聯想の雲として伴ふもので、藝術品の觀察に多くの感覺が伴へば伴ふ程、鑑賞者が其裡に没頭することも深いのであります(美的感情の標準の一)。感覺に訴へる所が深ければ、深だけ細かければ細かいだけ、人は藝術品に餘計魅せられる譯なのであります。

心像及思想即ち形式及内容

藝術家が發表

し傳達すべき筋即ち内容は、是を表はす手段として運搬器として用ゐられる形式と區別する爲めに、「思想」と呼ばれる事があります。これは「思想」と云つても藝術家の「意味」と云つても、又は「情緒題目」と名けても、何れにしても實は同じ事でありませぬ。扱、「思想」にしても「情緒題目」にし

ても、其發表傳達の手段として何等かの感覺的附隨物、又は附箋無しで意識中に現はれるものではありません。此の感覺的附隨物が感覺及心像なので思想又は題目は感覺と心像とに代表される所に其の意味或は意義があるのであります。

心像の論理的職分

論理的及實際的主意か

ら云へば心像と云ふものは、もつと遠い目的に達する爲に用ゐられる手段に過ぎないので、心像の確な形なり音響なりは、その的確な意味程重要な物ではありません。即ち心像それ自身の大切さよりも心像が代表して居る意味の方が遙に重大であると云はなければなりません。心像は一つの目的を達する爲めの手段でありますから。全く別な種類の心像からも同じ仕事も出来れば、同一結論も推斷される事もありませう。

猶例を擧げて申しますならば、上に引いたレイ博士の言葉では、博士は一分間を費す音楽の一曲を演奏したと想像すれば、一分間の長さが分か

ると云つて居ります。今度は音でなしに運動の心像で、或距離を歩く想像をして、一分間を量る人もありませう。此の二つの場合には別々な心像を用ゐて、しかも同一の目的、同一の仕事、即ち時間の推定がされたのであります。

これは實際上の事實としての例であります、これを次のやうに論理的結論の形で云ふ事も出来ます。レイ博士の推論を、「此の音楽の演奏には一分時を要す。余は今、心にてその演奏せられしを聞き、故に一分時は今過ぎ去れるものなり」としませう。又今一人の人は、「余は或距離を行くに一分時を要す、今余は其距離を行く歩数を想像せり故に、今一分時は過ぎ去れり。」と推論すると致しませう。此の論理的若くは實際的目的の見地から見ると、心像は音の心像にした所で、運動の心像にした所で、何れにしても要するに各個人の特癖に依るもので、其の感覺的性質は、音であれ運動であれ、格別仕事なり目的なりとは關係のないもの

であると云ふ事が出来ず。今一つ例を挙げませう。遠足をした一團隊の人々に、途上辨當を使つて場所を思ひ出させると致します、すると「それは丘の上であつた、私は其處の小川の音を覺えて居る。」と云ふ人もありませう。此の人は音の心像に依つたのであります。又「然様、小山の上であつた、私は其處で眺めた景色を覺えて居る。」と云ふ答もありませう。此の答は視覺の心像に依つたのであります。又「私は攀ぢ上つたので覺えて居る。」と云ふのもありませう。此の人は運動の心像に依つたのであります。此處でも亦心的作用の一端が行はれたのでありまして、聯想に依て一隊中の異つた人々が返事をし、聯想の連鎖即ち仲介者たる心像は、それぐく相異り乍らも、同一結論を得たのであります。

右に述べたやうに心像は過去の經驗の再現に有用な許りでなく、又將來を想像させると云ふ一層重要な役を持つて居ります。此の遠足をした人達

は各自の心像に依つて右の質問に答たのみならず、質問以外の場合にも此の心像を働かせることがあります。例へば小川の音を思ひ出した人は、これは詩作に好い所だと申しませうし、登攀の暑さ苦しさを思ひ出した人は、今後斯う云ふ處へ遊びに行つたり、晝食を使つたりはすまいと思ひませう。斯様に過去の經驗の心像は將來の行爲を變更するに關つて力あるものであります。又心像が將來の行爲に影響する以前に、心像其物が幾分變化すると云ふ事に注意しなければなりません。

一人の心には小川の心像が詩作の心像と一所になつて了ひ、又山登りを止めやうと決心した人は、其の決心に相應する心像を持つて居るのであります。それは登山の運動心像に加ふるに何等かの否定的運動心像を以てするので、頭を振るとか「もう彼處は御免だ。」と口に出して云ふとかする事もありませうし、平地歩行の心像（登山の否定を誘致する位の）であることもありませう。心像が斯

様云ふ風に變つて來ますと、最早單に過去の出來事を再現するに留まらず、創作的となつたので、次いで起るべき新しい行爲を示して居るものでもあります。

再現的心像は古い經驗を代表するものだと思倣して來ましたが、併し再現的心像は必ずしも實物の代表即ち代理的知覺ではありませぬ。元來吾々の意識は必ず將來に多少關係のあるもので、古い經驗は決してそつくり其の儘出て來るものでもありません。又さういふことは必要でもありません。心像の變化する程度は澤山ありますが、再現的心像は其中最も變化の少ないものであると云ふ事だけは云へるのであります。

心像の美的意義

右に精しく述べたやうに

心像と云ふものは論理的及實際的目的に對しては、たゞ手段として役に立つもので、餘り大切な關係を爲して居るものでないにしても、藝術及美學の方面に於ては最も重要な問題として現はれて

來るのであります。即ち論理的及び實際的に對しては視覺の心像が來ても、音の心像が出て來ても、運動の心像が働いても、少しもかまはなかつたのでありますけれども、美術上に用ゐられる心像は決してこんなに融通の利く無頓着なものではありません。ベートーの「ジオルジョーネ派」と云ふ論は何人にも合點が行く様に此の點を説いて居ります——

「音樂、詩、繪畫、其他凡ての藝術上の製出品は、一定の同量の或内容（即ち心像と成つて現はれて來るべき思想）を、別々の國語に翻譯したに過ぎぬと云ふ考へ、即ち繪ならば色、音樂ならば音、詩ならばリズムと云ふ技巧上の發表手段たる感覺及心像に翻譯されたものに過ぎぬと云ふ説は、通俗の批評の誤謬である。若しかう云ふ風にとれば、或る思想を現はす爲めには、色が來ても音が來ても構はないと云ふ事になり、従つて藝術上の感覺的要素と共に藝術の藝術たる生粹の所は凡て閑却され

て了ふ譯である。これと反對の意見、即ち藝術の感覺的要素は、他の何れの形にも變へる事の出來ぬ美の特殊の状態なり性質なりを有する。即ち色は色で獨特の美的價值を有し、決して音で代用する事が出來ないものであると云ふ原則がばつきり分かれれば、茲に眞の美的批評が始まるのである」と。

斯の如く實用的方面と美的方面とに依て、心像の職分が異ふのは事實ではありますが、併し又其の相異を除き大きく見過ぎてはなりません。藝術は究極は實際的のものであると云ふ論は後の章に申しますが、兎に角此處では論理的及實際的目的は、藝術的なものと違ふ事があると云ふ事だけ認めさせていただきます。

創作的想像心像

新しく出來た物を調べて

見ると、機械にしても、音曲の節付け即ち旋律にしても、戯曲の創作にしても、皆古い材料を新しく配置したものに過ぎないと云ふ事が分かりま

す。創作とは要するに配置の變改と云ふ事で、新奇とは畢竟在來の物の結合の謂であります。併し此の創作の路行きは、例へば笛を吹けばそれに合はせて踊つて呉れると云ふやうに、すぐ注文に應じて出來るものではない。命じたとて新しい結合は必ずしも出來ると限つたものではありません。つまり發明を強ゐる事は出來ないのであります。

新しい考が起るのは大抵天恵に依るものらしく、詩人、畫家、機械發明家、一口に云へばあらゆる種類の獨創家は新しい構想の神祕を感じ、又は是に襲はれるとでも申しましましやうか、云はれ新しい構想は突然に浮かんで來るものゝやうであります。

例へば或部屋に壁畫を思ふ通りに畫いて貰ひたいと頼まれた或る畫家の話によれば、成る程此處に繪を畫くのかと思つて、自分の描く可き空間を眺ると同時に、後にそこに描いたと寸分違はぬ構圖全體がありくと浮んで來て眼に映つたと申しま

斯の如く、發明は無意識の世界即ち潜在意識の域から、既に出来上つた形で湧き出す様な性質のもので、換言すれば間の好い偶發事件と云ふ様な性質を帯びては居りますが、それでも猶如上の偶發事件の起る機會を有意的に増す事は不可能ではありませぬ。換言すれば自分で資格を作る事が出来るのであります。即ち其人が神祕を感ずる方面と關係のある心像及觀念に浸潤するやうになれば出来るのであります。例へば數學上の發明は熟達した數學家に、音樂上の發明は音樂家に、繪畫上の發明は畫家に起るもので、要するに或方面に習熟して居る人は其の方面に於ける新發明の要素が多いからであります。

新しい關係を知覺する人又は臆説を生み出す人の精神状態の説明として、次に英吉利の文豪メレディスの傑作「エゴイスト」といふ小説の中の一部を引きましょう。

ドクレーは庭園の中を彼方此方と歩きまはつた。彼はかの内

心の舞踏鏡に映る時には、必らずとんだりはれたりして見える活潑な慧敏な機智をそなへた紳士であつた。彼は刹那に計略を見抜きもすれば刹那に仕組む事も出来た。併しそれは、其の鋭敏な知覺力を氣長に動かして、過ぎもせず又不足もない程にとつくりと思案を経た後に出来るのであつた。クロッスツエイがミッドルトン嬢に意があるといふ話を聞くと共に、此の四十時間中のクロッスツエイに關するあらゆる心像が、生き／＼と彼の前に浮き出して見えた。彼はその心像の何れをも毛頭考へるではなく、只置き換へて見分してゐるうちに、其の立派な容貌同様、鷹然とした彼の心は悠々と構へて、どこを攻撃すべきかはたゞ彼の本能の向くがまゝにしておいた。

兎角分別の勝つた人といふものは、事を爲るに上つた方法で、行きつた道へと、當て推量をする弊に陥り易いもので、この輕率な推量が迷路にまよひ込む元なのである。

が、即かず離れず、靜かに事件に眺め入つて、其の重さとか合を、よく／＼計るだけの材料を、見集める事の出来る人は、眞正の秘輪を握るか、さもなければいつそ何も得ない。寧ろ何にも得ぬ事の方が多いには多いが、さういふ人に限つて、知慧に囚はれる煩ひはなく、當推量をする人の様に、却て謎から遠ざかる憂ひもなく、ありのまゝに物を見る事が出来るものである。とはいふものゝ、さういふ人は、成功せんが爲めには、冷靜で悟りの好い許りでなく、時に應じて人の容子を正確に讀む術に達して居らなければならぬのである。

次に又暗示を得る工夫をもする事が出来ます。

有名な例としては畫家ターナーなどは、子供に繪の具をあてがつて、子供が是をいろ／＼に塗つたりなすつたりするのを始終注意して居て、偶然に色が結合して或る組合せを作り出すのを見てそれから發見をする事が多かつたと申します。

思考上の眞の創作的瞬間と云ふのは、心で類似を發見する時、即ち以前には現はれ無かつた類似、若くは部分的一致點に氣のつく時を指して云ふのであります。天才とは別々の物の間に、外の人に分らぬ捉へ難い類似點、若くは隠れたる一致點を捉へるの謂であります。例を舉げて云ふならば、二者の間には非常な相異があるにも關はらず、ガリレオは寺院の灯と彗星との間に類似を見出し、ニウトン^{Newton}は落ちる林檎と地球との關係を、又ワットは湯沸に起つた事と機關車に起る事との間に同一點を發見しました。

藝術的構成(布置)に於ても、やはりこの疑問を考へ、類似點を觀察する事が創作的の働きとなる

のであります。文學的效果は之と實に關係の深いもので、直喩、暗喩、諷喩、比喩、物語、比較等は皆之にはいります。主題を豊富にし、光輝を添へんが爲めに、作者は何かに其を譬へ様とするので、そこで比喩が作られたり、古い材料が新奇に列へ換へられたりするのであります。文學的比喩には斯うした部分的の一致が始終出て來ます。

一例を舉げれば――

灰とこそなれ

人みなが思をこがすうつし世の望みは、

はたさかゆるも とばかりあれば

しこの野づらの雪のこと

しばしなてらし――消えぞゆく

てりては

一方には「うつし世の望み」と云ひ、他方には「野づらの雪」と云つて居りますが、此の二ツを一所にして無常流轉と云ふ共通要素を強ふるの詩人の創作的事業であります。「現世の希望の儚なさ」と云ふ思想を強める爲めに「野づらの雪」な

る心像を發見する事は藝術的創作であります。此の「類同の知覺」の働いて居る所は、繪又は音樂では表はし憎くさうに思はれますが、併しそれは

發見したのであります。又音樂家は同じ題目を取つて、別の運動に發展させ様々のものに譬へます。例へばそれをマーチカワルツに仕組む事も出來ませうし、挽歌にも快活な環舞の曲に

見掛けだけで、實はそんなでもありませぬ。此の圖は北齋の「富士百景」中の海の波の略圖ですが、一

目見て分かる通り、決して實物を其儘寫生したものではありません。此

明の痕が歴然として居ります。此の繪の最も特出して居るのは波烟の端を距狀けつめに描いた所でせう。又

天才とは隱微な且新しい類似點を捉へるものであると申して來ました。随つて天才が其の思想感情を發表するには、珍らしい綺語と顯著な

と幾千幾億の握り詰めた手や距との類似を認めた點なのであります。此の類似を描き留め且それを強めて、茲に北齋は繪畫的發明を仕たのであります。實際の波を斯ふ云ふ風に觀、且特點を誇張する事に依て、彼は單なる波の思想に生氣と峻刻とを添へる心像を



心像とを用ゐるので、此の點がとりもなほさず其の藝術家たる所以なのであります。要するに大藝術家の思想と云つた所が、それ程懸け離れたものではありませぬ。シェークスピアにしても在來のものを彼方此方から借用致しましたし、凡ての大創作家がやはり皆さうなので、たゞ其の思想に與へた的確なる形式だけが、唯一獨特のものであると云ふに過ぎませぬ。元來抽象

的な考へを、強い明らかな心像に直しますと、其效力は幾倍かされたと同じ事になるので、例へば「自制」と云ふ考へは、そのまゝでも尊重すべきものではあります。吾は靈の長なり」と云ふヘンリーの言葉の様な云ひ方にすれば、余程力がつきます。藝術家の特に意を用ふべき所は、強く効果の多い形式、新奇な面白い心像を探し出す事であります。

天才が珍らしい心像を作りますと、得て誤解を招き易いもので、公衆の或者には朦朧として捉まへ所なく思はれるのは已むを得ません。シェレーの「雲雀」などは此の例で――

いとたかくいやたかく
おほづち
大地ゆ　なればとびたつ、
火の雲のこと………

「雲雀」と「火の雲」との感覺的内容を分析しますと何處に類似點があるのか一寸分りません。従つて其の心像に動かされぬ人ならば空漠として居る

と云つて斥けてしまひませう。がこれを理解し愛し且其の適切と正當とを感じ得る人ならば、「雲雀」と「火の雲」との間の理解は出来ないにしても感ずる事は出来る。或微妙な連絡を認めるに相異ありません。二者の間には或情緒的、一致がありません。吾々は理性から見ても従ふ事の出来ぬ者に對しても、猶同情を以て評價する事が出来ます。純朴な心は、その到底解剖する事も説明する事も出来ぬ作品の味を感じる事が出来るものであります。メレディスの小説には理屈無しで只悟る外仕方のない面白い奇抜な心像が澤山出て居ります。「眼臉にローマンティックな物語の宿つて居る様な娘」とか、「磁器其の儘の優男」とか、又「感傷主義とはセンチメンタリズム肉欲主義のいと絆とは柔らかに爪さぐる事を云ふ。」など、此種の非常に生き／＼した面白い言葉を應接に違もない程浴せ懸けます。